

第4節 小形内行花文鏡について

— 下佐野遺跡出土鏡について —

小林 三 郎

〔1〕

我が国における仿製鏡の成立が、いつのことであったかは、いまだに結論がない。弥生時代の、とりわけ後期後半に於いて北部九州地方を中心にみられる「小形仿製鏡^①」あるいは「小銅鏡^②」が、その原鏡や母型が比較的把握し易い仿製鏡として認識されている。それらは、その出土状況、伴出遺物に共通点の多いことなどから、その製作年代についても、又、大陸や半島との関係についても検討が進められつつある。しかしながら、古墳時代の古墳副葬鏡にみられる諸仿製鏡と弥生時代にみられる「小形仿製鏡」との間には、年代的な問題だけでなく、製作技法や原鏡の同定作業の中でいくつかの検討事項を含んでいることは確かである。

古墳の副葬鏡が、中国製三角縁神獣鏡を中核として方格規矩四神鏡・内行花文鏡と画文帯神獣鏡の一部がそれに加わるという組み合わせで、古墳の成立当初は出発したと考えられてきた。事実、初期の古墳の中では副葬鏡を持たないグループの編年作業が困難を極めていた時期もあった位である。古墳の編年に、古墳出土の土師器編年が応用されるようになってからは、まだ日が浅い。墳丘出土の土器、内部主体に副葬品として土師器が加わる段階の認識など、ようやく集落跡出土土器と古墳とが一それでもなお間接的であるが一結びついてきた。しかしながらそこから出発する古墳編年の作業上の矛盾が改めて提示されることにもなった。即ち、古墳出土土器の年代が古墳の年代を素直に表現しているのか否かの問題である。古墳の副葬鏡の年代が、即ち古墳の年代を表現しえないのと同様に古墳出土土器も古墳を構成する一要素にすぎず、そのまま年代を表しえないという見方をすれば、古墳構成要素の総合的理解を深めることが古墳編年を進める上で先決の問題となることは必然である。

弥生時代の仿製鏡と直接的に関連しないだろうと推測される古墳時代の仿製鏡のもつ歴史的な意味は、弥生時代社会から古墳時代社会へと変化する中で、鏡を媒介とする権力構造の有無を検証し、三角縁神獣鏡を代表とする権威の象徴的古墳と、そうでないものとの区別をしながら、古墳発生当初における政治的・社会的重層構造を導き出すところにある。ことに古墳出土土器に導き出される古墳の年代観は、従来の年代観よりもはるかに溯るものを想定するようになり、各地における弥生時代との接点について種々な問題を投げかけるに至った。古墳の発生が、極めて重大な意義をもつ故は、この社会変革の原点の解明という一点にかかっていると云ってもよいだろう。

〔2〕

下佐野遺跡の前方後方形周溝墓から検出された鏡は、小形の八花文内行花文鏡である。面径が比較的小さいことと、鋳上りが不鮮明なこと、内区八花文以外の文様構成が中国鏡のそのの中に

みられないことなどから、これを古墳時代の仿製鏡と判断している。古墳時代の仿製鏡とする見方が的を射ているとすれば、仿製鏡の中では類例が少ないものということができる。中国製内行花文鏡のほとんどが八花文を表現しているから、それを模倣したとすれば八花文の仿製鏡ができ上がるとみるのは当然であろう。弥生時代にみられる小形仿製鏡の中に、内行花文を表現しているものがあるが、花卉数も異なるし原鏡となった中国鏡も異なっていることが指摘される。弥生時代の仿製鏡と古墳時代のそれとが流れを異にしていると考えられる原因はそこにある。

古墳の副葬鏡の中に仿製鏡がいつから加わるかという問題はかねてから論ぜられてきた。古墳副葬鏡の中の、いわゆる伝世鏡類が最初に模倣の対象となったとする梅原末治氏の見解から脱して、三角縁神獣鏡がいち早く模倣の対象となったと指摘した小林行雄氏の見解^③は、現在でもおおくの支持を得ている。小林氏の一連の三角縁神獣鏡の同範鏡論の中でもそれは生命を保っているし、後続の近藤喬一氏らの論考^④の中でもそれを傍証する部分がある。しかし、仿製鏡全体の流れの中では、いくつかの解決しなければならない問題が介在する。たとえば、伝世鏡類の模倣と考えられる仿製鏡と中国製三角縁神獣鏡との伴出関係はしばしば見られるし、中国製の伝世鏡類と仿製三角縁神獣鏡との伴出関係もよく知られるところである。ところが、古墳時代の仿製小形鏡の出土例についてみると、伝世鏡類や三角縁神獣鏡類との伴出例が、極めて少ないことに気付くのである。単に製作年代が違うからというだけでは説明のつかないことである。

1986年に京都府城陽市で発見された芝ヶ原古墳出土鏡^⑤は、その模倣の原鏡は不確定ながら、おそらく我が国における仿製鏡とみてよいものである。内部主体の墓坑上面に敷き詰められた礫の中から、いわゆる庄内式土器（壺形土器・高杯形土器）が検出されたというから、芝ヶ原古墳の年代や出土鏡の年代について重要な示唆が含まれていることになる。古墳の開始を庄内式土器の時代に直ちに比定することには大きな問題があるにしても、その伝統が色濃く残存する時期のものという解釈はできるかも知れない。その段階ですでに伝世鏡類や三角縁神獣鏡以外の模倣鏡が出現していたとすれば、仿製鏡全体に関する年代観を大きく変更せざるをえなくなる。しかし、弥生時代の鑄鏡技術との差は大きく、その系譜に連続する要素を検出できないのが現状ではなかろうか。

〔3〕

全国的視野でみると、古墳時代初期の段階では、古墳副葬鏡以外に小形の仿製鏡が集落跡などから検出される例がいくつか存在する。いずれも面径5 cm位から7～8 cm位の小形のもので、重圈文鏡であったり内行花文鏡であったりする。これらについては筆者がかつて論じたことがある^⑥。しかし、今までのところ類例が古墳の副葬品となっている例は極めて少ない。と同時に、古墳時代初期の周溝墓の副葬品となっていることもその例を知らない。そういう意味では、下佐野遺跡出土例は、極めて特殊な例と考えざるを得ない。関東地方では、東京都八王子市宇津木遺跡の方形周溝墓の溝中から、素文小形鏡の出土例^⑦が知られる以外はまだ類例を見ない。下佐野例にしても宇津木例にしても、あるいは他の当該時期の集落跡出土例をも含めて、弥生時代小形仿製

鏡群と直接的に系譜をたどることのできる材料はないと云ってよい。又、京都府芝ヶ原古墳出土例を、古墳時代に於ける最初期の仿製鏡としても、その間における鏡背文様の系統や技術的な面での差違をみとめなければならないのが現状である。筆者はかつて古墳時代の小形仿製鏡を論ずる中で、仿製鏡の系譜には2つの流れがあるのではないかと指摘したことがある^⑥。すなわち、古墳時代における三角縁神獣鏡類・伝世鏡類の如き大形鏡の模倣によるものと、系譜的には連続しないが、弥生時代の小形仿製鏡を基盤とする小形鏡の仿製鏡との2者である。前者は本格的な古墳の副葬品として前期古墳の中核的部分を構成し、後者は政治的・社会構造の基礎的な部分で、言い換えれば全国各地に残る農業協業体の祭祀的媒介物としての役割を堅持させられたものとして遺存したのではないかと推定した。それ故に、集落跡から脱却しえない小形仿製鏡に社会的な意味あいを与えようとしたのであった。

下佐野遺跡では、溝中の出土とは云え、前方後方形周溝墓に付随するものであり、同時に伴出した土器群があって、その埋置時期の判断に容易なものがある。まして、周溝墓と呼ばれるすべてが「墓」であるとは断じ切れないという意見すらある。又、周溝部がいわゆる共同墓地の埋葬部分ではないかとする意見もある。いずれにしても周溝墓全体は、その周溝を含めて一つの墓域を形成しているという理解は妥当なものであろう。そこで、鏡の出土位置が大きな問題となろう。すなわち、下佐野遺跡では、出土鏡が墓の埋葬品ではなく、共同墓の墓域内に埋置された祭祀的性格の濃いものと理解した場合に、他の当該期のたとえば集落跡の出土例と同じような性格のものとして扱うことになりはしないだろうか。周溝墓が、いわゆる古墳と違って独立的な性格を示していないが故の解釈の仕方ということもできる。

下佐野遺跡の周溝墓出土土器の中心は石田川式土器であり五領式土器である。現在のところその年代は西暦4世紀代に比定されている。同地には他にも周溝墓があるが鏡の出土はない。又、周溝墓に隣接する集落跡からも鏡の出土はないという。調査の区域に限定があって全体を見ることができなかったのも、詳細はなお不明というべきであろう。

下佐野地区を含めて現在の高崎市周辺、井野川、烏川流域での初期古墳は、芝崎・蟹沢古墳と元島名將軍塚古墳が挙げられよう。殊に將軍塚古墳は、前方後方墳という墳形を持つ点で下佐野方形周溝墓との関連が論ぜられるべきであろう。元島名將軍塚古墳の調査報告^⑧によれば、出土土器の面での共通性が認められ、両者の年代が極めて近接していることが伺われる。元島名將軍塚古墳には仿製四獣文鏡が副葬鏡としてあり、古墳時代の小形仿製鏡としてはその原鏡を推定しやすい鏡式のものである。面径7.1cmというから同式鏡の中でも小形の部に属している。下佐野鏡と軌を一にする仿製鏡という見方が出来そうである。

墓としての性格の相違の中で、鏡式こそ違え同類の小形仿製鏡を埋置したり副葬したりという行為は、古墳の成立という歴史的事象の中でどのように位置づけられるであろうか。それはおそらく集落内共同祭祀からより広い地域を含めた政治的共同祭祀への変革を意味するものであろう。

第3章 調査の成果と問題点

(註)

- ① 高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について」考古学雑誌58-3 1972年
- ② 杉原荘介『日本青銅器の研究』1972年 中央公論美術出版
- ③ 小林行雄「古墳の発生の歴史的意義」史林38-1 1955年
- ④ 近藤喬一「三角縁神獣鏡の仿製について」考古学雑誌59-2 1973年
- ⑤ 近藤義行「芝ヶ原古墳」城陽市埋蔵文化財調査報告書16 1987年
- ⑥ 小林三郎「古墳時代初期倣製鏡の一側面」駿台史学46 1979年
- ⑦ 大場磐雄他『宇津木遺跡とその周辺』1973年
- ⑧ 田口一郎他『元島名将軍塚古墳』高崎市文化財調査報告書22 1981年

〔参考文献〕

梅沢重昭「群馬県地域における初期古墳の成立」群馬県史研究2・3 1978年